

◆2010年 9月

今月の特選句 八木健選

孕牛虹を生みつつ尿りけり (黒澤正行)

尿の飛沫から生まれた虹も、空に架かる虹も美しさに変わらない。牛自身は、美しい虹を描いていることに気づかぬことの滑稽と哀れ。

上機嫌も不機嫌もあり蟬騒ぐ (池田亮二)

一般的には、上機嫌だと声は高く不機嫌だと低くなる。蟬が鳴くのはオスだけで、求愛のためとか。甲高く騒いでいるのは、恋の成就した証。

平等な気持ちにさせる大雷 (岡部一兆)

雨宿り、互いに知らずに親しく話していたが、実は刑事と泥棒だったということもあり得る。大雷は、立場を越えた連帯感を生むという発見。

二十年行方知れずの生身魂 (種谷良二)

故人に年金を支給し続けるという、お役所仕事。受け取る方の「ズル」も許されない。返せぬを承知で告訴や返還要求も、おかしなことばかり。

肩書は監視員なり庭プール (三橋真砂子)

監視員と聞くと、どんな大役かと思うが実は自宅のプールだった。監視員の肩書きは、主婦が自身に命名したのである。責任感溢れる一句。

ニアミスの香水被弾後遺症 (山下正純)

被弾は、知らぬ間に香水を浴びていたということ。後遺症は、それが元で家庭内に不和が…。なぬ？ 後遺症があってもニアミス歓迎だと？

今月の秀逸句 七七をつけてみました

仕事か遊びか横顔みせて祭笛 (秋月裕子)

・・・仕事じやみせぬ真剣な顔

飛び入りに手足まねられ踊りかな (有富洋二)

.....真似られ俺の手足ぎくしやく

謹厳な人ほど疎まれ炎天下 (金澤 健)

.....昔も田沼恋しきなどと

極楽に泥沼のあり蓮の花 (北村マコ)

.....あの世にもある掃き溜めの鶴

寒暖計うなぎ上りの土用の日 (工藤泰子)

.....しらす不漁で価格急騰

かなぶんの磁力にスカート持ち上り (杉村福郎)

.....黄金ばらまくエッチな奴め

帰省子に座る間も無き誘ひかな (高田菲路)

.....都会の暮らし聞かず仕舞いに

重労働終へたる蟬に浅田飴 (彦阪義久)

.....水に溶かして吸はせておやり

浮いてこい言はれなくても浮いて来る (前川敏夫)

.....浮いてくるてふ呼び名に変えよう

糠味噌や額の汗も味の中 (三塚不二)

.....少し辛めの味が好評

箱河豚の立方体の暑さかな (山本あかね)

.....暑いときにははふくれ面に

帰省の子突如現れ長居する (井野ひろみ)

.....三食ただで昼寝もできて

蠅生まる赤貧洗ふ厨にも (渡辺さだを)

.....大邸宅は住み難いらし

青山桂一

田畑へはもぐら威しか大夕立

虹橋を架けて壊すは青春期

臭ひ濃き夏草だけの休耕田

秋月裕子

万緑の中のひと粒ホモサピエンス

高田敏男

人の世も儘にはならずいぼむしり

風鈴の一句味わう二枚舌

小判草ふえる路肩や無料道

高田菲路

好きな子へ草矢放ちて嫌はれし

仕事か遊びか横顔みせて祭笛
窓明けて団扇の風でくらす粋

麻生やよひ
曲がり道教へたくなる道をしへ
開始すぐ工事中断虹の橋
スポンジの飽和状態汗滲み

足立淑子
秋灯下電子書籍は似合わない
野性すこし内に秘めたる秋の夜
あつあつの焼栗買って遠回り

有富洋二
洗いものとかえひっかえ夏果つる
隣人のこれも隣や墓参り
飛び入りに手足まねられ踊りかな

有吉堅二
名水をちよつぱり分かつ金魚玉
夏痩せかダイエットかと首捻る
生まれたることが不運の油虫

安藤淑子
爺婆の竿の浴衣はフラダンス
御中元我が家は素通り宅配車
御中元メタボ対策の品届く

飯塚ひろし
何もかも省略利かず残暑かな
神官の頭が好きな赤蜻蛉
貼り紙の誤字正しをる秋暑かな

石川節子
秋うらら出戻りし子の羽根も伸ぶ
天高し元祖3D対応型
熟女良しけれどどこかに青蜜柑

井口夏子
携帯電話捨ててしまおかあめんぼふ
サングラス胸はる日はいつの日ぞ
炎天下尾っぽも舌も垂れる犬

巨神戦語るは法度ビアガーデン
帰省子に座る間も無き誘ひかな

高橋マキコ
ベネチアの海のきらぎら夏の朝
ゴンドラの迷路辿りの夕涼
雲の峰水上バスはすし詰めに

高橋 都
幽霊も汗にまみれて芝居小屋
ぐつぐつと日本列島大暑鍋
青蛙ペンキとろけぬ我鬼忌かな

高橋素子
お隣の鰻の匂ひに箸すすむ
雷鳴に駆け出し膝に笑はるる
薫らざり大津絵団扇の藤娘

高松雄三
風鈴や懐膨らせしやべりをる
蜘蛛の囿の家主不在で空ありぬ
しまなみの車窓を走る夾竹桃

田代陽光
わが十八番昔も今も犬泳ぎ
茄子鳴いてなまくらの刃に抵抗す
カンボジャの涼しき笑みの忿怒神

田中章子
この想ひ仕掛け花火にたくしけり
西瓜割り思はず頭父かくし
うらなりと笑はれたれど茄子の馬

田中勇
西成の裸の国の釜ヶ崎
労務者の鞆一つの蝸牛
労務者の蒸し暑さから暴動し

谷むつみ
竜宮を追ひ出されたる海月かな
デジタルに未だなりきれず時計草
ゴキブリの早さに負ける喜寿と古希

池田亮二

上機嫌も不機嫌もあり蟬騒ぐ
不夜城のコンビニ昔遊女宿
玉の肌抱いて罪あり蚊は討たる

伊藤浩睦

まるごとのパイナップルの邪魔臭さ
第三もありややこしくなるビール
雨乞や五十年続くダム工事

稲沢進一

秘密とて踊る阿呆で通しけり
蜜豆や誰でも自分にやさしくて
ただ浮いてゐるしか知らず泳ぐなり

井野ひろみ

うぐいすや毎日聞かす練習歌
最短で道路横断断蜥蜴の子
帰省の子突如現れ長居する

今城夏枝

マイカーに我をとじ込め夏の雷
葉を上げけふのはじまる合歡の花
うちは風恋仇にも送りたる

越前春生

水鉄砲ゴム人形がミャーと鳴き
知らぬ世に遊びし名残り昼寝覚
跡継ぎのやたらと増やす農休み

奥脇弘久

丑の日に由緒正しき冷奴
ひとり旅同士のふたり黒日傘
転た寝を蚊取線香見張り番

岡部一兆

稼ぐ妻ビールは先におつぎする
あの事で妻どのくちなし昨日今日
平等な気持ちにさせる大雷

笠 政人

掛声の威勢に釣られ蛸を買ふ
飯蛸の恨みの目玉歯につまる
生身魂ぴんぴんころりと宣へり

種谷良二

二十年行方知れずの生身魂
星のなき眠らぬ街の星祭
ごきぶりで狩猟本能火が着きぬ

田村米生

プールより上れば見る気失せにけり
昼寝覚めまづへそくりを確認す
西瓜切る七分分は線をつけ

飛田正勝

猫飯のお代りをする冷し汁
鬼平と同じ肴で冷し酒
ひよつとこを叱るおかめや夏祭

永島董玉

七癖のうちの潔癖徴拭ふ
敗れても兜脱がざる兜虫
羽抜鶏己れの声に驚きて

西 をさむ

土用太郎四国三郎生き返る
大奥に女三千昼寝覚
パンダ来て団地の踊りらしくなる

原田 曄

梅雨明の入道雲の気合かな
性陽気特技回転向日葵は
半分は泡と化したるラムネかな

彦阪義久

歳時記に激暑なる語の見当たらず
重労働終へたる蟬に浅田節
敗訴して遂に鰻は蒲焼に

久松久子

鮎飯のために残せる団扇かな
梅の実の四角の枳に量り売
吟行に送り出したる天の川

日根野聖子

大の字になれぬ広さの夏座敷
羅の中の羅蛇の衣
変身の仕上げのひとふり香水の

金澤 健

終戦日黑白変ずる世はオセロ
美人だと云はれ外せぬサングラス
謹厳な人ほど疎まれ炎天下

可知豊親

見紛へりプラスチックの迎馬
星月夜堪能したる科学館
ほんたうに門に火を付け怒らるる

加藤澄子

冷房の音のみ老人病棟は
愚陀佛庵城山津波に呑み込まれ
吹き出せり夏休み子ども電話相談に

加藤 賢

底紅や十七の子と背くらべ
ひい孫に恋の手ほどき生身魂
わが顔を覗き唾蝉遁走す

川島智子

合歓咲くや儚なき夢の参院選
居直りて三食昼寝恥じぬ齡
梅干して摘まみ食ひして出る元氣

川高郷之助

鰻食ぶ妻の滋養の頻りなる
梅雨寒や推す人なきも投票す
暑氣払ひ明日の英氣と思ひきや

北村マコ

波音のどどどと聞こえ夏帽子
極楽に泥沼のあり蓮の花
うっぷんを闇にほり投げビアホール

久我正明

扇風機「ダメ～」とゆつくり首を振る
夏帽子かぶつたままの寝癖かな
風鈴のいくつも吊るす蒸し暑さ

工藤泰子

脱皮して進化を図る蛇の衣

広瀬雅幸

ガングロの娘なりしが白日傘
新茶には水の銘柄吟味して
ダイエット水中りして達成す

藤岡蒼樹

文机や和金ぱくぱく腹話術
手花火や交叉す帰途の前照燈
鉄板のベッドに眠る蝉骸

藤森莊吉

人も蚊も隔てなく居る古き家
炎天下あれこれそれもうろ覚え
打水のリズムはいつもずんちやつちや

藤原セツ子

梅雨最中テレビにずらり傘マーク
炎天の歩行器の夫わが影に
来し方を悔いて寝返り熱帯夜

坊野念寿

風化して美談のさばる敗戦忌
戒名で呼ぶことはなし墓洗ふ
夏の蝶我にも在りしあの頃が

前川敏夫

浮いてこい言はれなくても浮いて来る
西瓜割る薩摩隼人は示現流
かけてある方が驚くサングラス

松尾軍治

椎敲に椎敲重ねうな井に
蛇行して蛇の道先の蛇口かな
脱がされて海月のごとくなりけり

丸山紘一

ひとときのシャガールに忘る猛暑かな
夏場所や相身互ひの砂被り
御器嚙も三十九度には音を上げり

三木蒼生

国違えしや舶来の名古屋場所

揺れやまぬゼリーを匙に掬ひけり
寒暖計うなぎ上りの土用の日

黒田忠一
ゲリラともかみなり雲に潜む影
サクランボオマエモアマミヒカエメカ
夫婦喧嘩で暑さ紛らし熱帯夜

黒澤正行
相撲より野球の好きな力士かな
吾を刺す蚊たぶん禁煙禁酒だろう
孕牛虹を生みつつ尿りけり

酒井鹿洋
へそあまた雷神迷ふ現代つ娘
珍名に神主まどふ七五三
見上げればおやじの拳骨雲の峰

桜井宇久夫
汁だくの牛丼食ひて汗だくに
熱中症予防と水にむせびけり
叩かれて売れ残りたる大西瓜

佐藤古城
あつばつば扱も日本のお母さん
丸金の腹当て胡坐のめの児かな
暑き日のぬけそで抜けず木偶の首

佐藤義子
たわむれて葉つばに卵もんしろちよう
美味しいとドクターストップ何んのその
顔じゆうにスイカマーク付け夏来る

齋藤八兵衛
五七五と困碁とゴロ寝のダメ家長
増えている空き家とカラス爺と婆
老人に仕事ないから惚け増える

佐野ゆきこ
冷房の利きたる家に犬一匹
クモの巣も物干し竿で一仕事
水やりは全身武装で蚊と血戦

藪蚊てふ囚人服の悪女なる
冷蔵庫に使はれてをり妻の留守

三塚不二
十個の目釘付けにして蟬生る
糠味噌や額の汗も味の中
ネックレスちらつかせて祭笛

三橋真砂子
肩書は監視員なり庭プール
山滴らせマイカーの天城越え
何よりも蟬の抜け殻喜ばれ

村上美和
帰省の子皿を洗つて行きにけり
傘の柄にしがみつく女ゲリラ梅雨
木洩れ日をふりまいている今年竹

百千草
究極の用の美といはむ蜘蛛の囿よ
茉莉花や父母に似ぬ鼻柱
残党の跡形消ゆる大夏野

森 要
暑い夏寒い政治に選挙かや
珍しや越中旗めく梅雨晴間
唄踊り爺々婆々多き夏祭

森岡香代子
大空を半分走る虹の帯
朝風呂や己が暑さを流しきる
風こしらえ団扇の裏表

八木健
夏ばては帽子にもあり八月尽
ワタクシは秋の季語かと日焼跡
熱弁に溶かされ水にかき氷

柳澤京子
雷神の落ちて独居の腰抜かす
かき氷「ミルク嫌い!!」とだだこねる
雷光やにたりにたりにと夫戻る

佐野萬里子

大入道電線擡げ役もあて
大入道暑さに舌出し項垂れる
奴さん毛槍振り振り汗流す

澤田篤恵

雷も親父も地におち雨上る
秋彼岸おいてけ堀の余生かな
天窓の四角い空の丸い月

首藤虎男

だだこねし出来悪だんご愚たらず
清白や稚児呼びかゆに春まねき
沢登り河鹿聞きつゝ夢見滝

壽命秀次

金髪を一気に剥き下ぐ唐黍
伊賀甲賀根来か堰の水馬
新婚の寝所ちらちら扇風機

柴田真一

傲慢で割りそこねありかき氷
人情のきめ細かさや貝割菜
怪談も列島熱に早上りて

清水呑舟

今宵また妻の言ひ訳冷奴
サングラス外して妻の顔となる
また掛るオレオレ電話秋暑し

白井道義

金魚にもそつぽ向かれて老いにけり
吟行の御一行様夏料理
ごきぶりを御用御用と追ひ回す

杉村福郎

ががんぼの逃げる方へと子は逃げる
すててこは「とつくの昔捨てました」
かなぶんの磁力にスカート持ち上り

鈴木和枝

蛤が息に向き替え梅雨休み
カードが吸い込まれて誰かと話してる

山内重昭

がつくりと老ひて夏瘦せ外骨忌
天までは届かず凌霄花落とす
無花果や覆ひ隠せぬ恋の傷

山内重昭

犬も溶けゆらゆらゆらと逃げ水に
空港の秋の見送りドラマめく
ぼつねんと食べて西瓜の種を吹く

山下正純

牛鬼の群れ闊歩せり里祭り
炎天の干魚その名は我が身なり
ニアミスの香水被弾後遺症

山本あかね

裸子を抱きて女の仁王立ち
箱河豚の立方体の暑さかな
泳ぐなり赤きふどしをなびかせて

山本けい子

蚊に狙はれるそのうちの一人だけ
ばあちゃんや遠雷に臍隠す
カメラマン息止め蓮の開花待つ

山本 賜

青芒とりあへず怒つてはをらず
ていねいに朝顔市の人を描く
砂育ちなり硬さうなヒメヒマハリ

横山喜三郎

特大のてるてる坊主運動会
大手振るばついちばつに盆踊
終盤は親子騒動夏休み

吉野香風子

人類の口にあふれて一人者
這ひ登りなにを覗くや葛の蔓

渡辺さだを

梅雨滂沱愚陀仏庵もその餌食
でで蟲も出水嫌って甲羅干
蠅生まる赤貧洗ふ厨にも

田廻りのおたまじやくしに負けていた

渡邊美代子

炎天下喉の奥より烏啼く

旅役者白塗りのまゝ秋刀魚焼く

秋雨に肩濡らしつゝ逢ひに行く